第 44 号
昭和61年３月

会　報

発　行　北海道高等学校
教育研究会事務局
札幌市中央区旭ヶ丘６丁目５番地18号
札幌旭丘高等学校内
電　話　561－１２２１番

ごあいさつ

北海道高等学校教育研究会
会長　小柳六郎

はやいもので、本年度も余すところいくばくもありません。会員の皆さんには、年度末の諸業務に忙殺され、まさに寧日なしの毎日のこととお察しいたします。

さて、第23回の高教研教育研究大会も、関係各位の御支援により、盛大にしかも有意義に終了することができました。例年どおり、物心両面にわたり御後援を賜った北海道・札幌市両教育委員会及び北海道高等学校長協会に、会員の皆さんともども御礼を申し上げるとともに、盛会を慶び合いたいものです。

それにつけても、放送大学教授の加藤秀俊先生から、生涯教育に関するタイムリーなお話を直かに伺ったり、拓銀常務の石黒直文先生からは、高校が抱えている深刻な課題にからんで、企業の求める人間像をユーモアたっぷりに解明していただくなど、これまで以上の盛り上がりをみた研究大会でした。各部会にしても、多数の参加者を得、極めて充実したものであったと聞いています。この成果も、部会を含めての講師先生方のお力添えによることは無論ながら、偏に、提言、助言、司会、記録、運営に当たられた各先生の御労苦、会場を提供された各高校、施設の御厚情、それにもまして、参加した四千を超す先生方の御熱意によるものです。改めて敬意と謝意とを表させていただきます。

このように高教研は、年を追って充実発展の途にあり、他府県から問い合わせが舞い込むなど、全国的視線を集めています。したがって、本部事務局としましても、伝統の火をいっそう燃え盛らせる責務を痛感せざるを得ない状況下におかれています。

ところで、事業を遂行する要素として、３Mが必要とかいわれます。人（MAN）、方法（METHOD）、金（MONEY）の謂です。これまで当研究会は、この三者を何とか遣り繰りして運営してきました。しかし、役員会の開催、大会時の役員委嘱、各講師の招聘、紀要の発行等々、一切の業務を行ううえで、関係する皆さんには、相当以上の御無理を願っているのも現実です。会員の大勢の方からは、他団体並みに経費アップを図れとの声も寄せられていましたが、時節がら極力経費を節減して、登録料及び参加料については、ここ数年据え置いたままで今日を迎えています。ところが、諸物価の値上がりに加えて、新年度は道からの補助金が更に削減されることになったこと、また、養護教諭部会（仮称）が新設されることになったことなど、諸般の事情から、登録料等若干の値上げやむなしの状況をみるに至っています。

会員の皆さんの積極的な御理解をいただき、いわゆる３Mの三位一体を図ることで、会員の皆さんのための北海道高等学校教育研究会を、より全国に誇れるものにしたいものです。末筆となりましたが、会員の皆さん及び関係各位の御健勝を念じ上げ、来るべき第24回研究大会に、名実ともに大きな期待をかけて御挨拶といたします。

〔日程第一日・全体集会〕

〈全体講演〉　　（午前の部）

〔講演要旨〕

「生涯教育の将来」

放送大学教授　**加藤　秀俊氏**

日本という国が今日のようにあらゆる面において、極めて高度な発展を遂げたことは既に自他共に認めることであろうが、その理由としては様々なものが考えられる。とりわけて私は教育の力の大きさがその重要な因を成すものと考え、教育面から見られた日本の発展、更に今後の教育のあり方等について私見を述べてみたいと思う。

日本人一億二千万人の知的質度は極めて高いものであると言える。現在様々な形で起こっている教育問題に対する国民の関心の深さ、家庭における教育の意味づけの高さ等の他に政府の教育優先の政策等どれをとっても教育王国日本と言えるような現況が見られる。このような教育王国の現在を築いた要因は何か。四点にまとめて話してみたい。

一つには、日本の社会・文化の中における教育の位置の重要さが挙げられよう。

過去の日本人の生活を様々な形で律してきた大きな理念の一つに儒教が挙げられるが、儒教の根本理念は「学ぶ」ということである。あらゆる面で学ぶことの意義が説かれ、中国において「士大夫」と言えば文字を読み書きできる人々を指し、それが国民の目標となっていたのである。

日本においては室町期の連判状他に庶民の文字が残存しているが、ヨーロッパのグーテンベルク以前に日本では庶民が文字を立派に書けていたのである。その後の織豊期に日本では「文武両道」が叫ばれるようになり、「武」のみならず「文」にも通ずるものが立派な武士と言えたのであった。「平家物語」にも合戦のさなかの漢詩・和歌のやり取りが描かれている。

更に十七世紀の鎖国政策が「文」を重要視してきた日本の伝統をエスカレートさせた。外に発散すべき国のエネルギーがことごとく内向したのである。道路整備が国内旅行を国民的規模のものとし、文化面での消費活動が盛んになり、寺小屋・藩校の発達等によって、十九世紀半ばの日本人の文盲率はわずかに40%であった。これらに見られる「文」の重視の根底には当然のことながら利害心が働いていたことは否定できない。つまり、読み書きに秀でた者が金もうけできたのである。それと共に日本の個人主義が挙げられよう。身分家柄不問で、知的に優れた者が出世できたのである。

要因の二点目として戦後の日本の軍事支出が極めて少なく、軍需にとられるべき優秀な技術を身につけた人材が民需に向かう点が挙げられよう。ことごとくが内需型であり、したがって教育も内側に向かうのである。

三点目には日本の科学技術の変動の激しさが挙げられよう。社会の停滞は教育につながらぬものである。変動の時代こそが教育の進歩を要請し、さらに学校教育だけでは済ますことのできぬ生涯教育の必要を強く訴えかけるのである。変動に合わせて、人は日々勉強を続けなければ時代に追いついていけない事態が生じているのである。様々な変動は技術にのみとどまらない。国語の語彙・発音・表現方法ですら変化をまぬかれていない。新しさにただ無自覚に迎合することは避けねばならないが、少なくとも新しさを知らねばならない時代が来ているのである。この点については日本の企業や医学の世界において、いかに就職後の研修が重視されているかを確認にすれば明白なことであろう。

四点目は、他国に例のないほどの日本の長寿化がもたらした新しい時代の要求である。「人生50年」と言われた時代ははるかかなたに遠ざかり、今や人生80年という時代を迎えた。個人にとってその変化がもたらした本質的な意味は何かと言えば、「退屈な時間」が長く続く、ということである。60歳定年後の20年をどう生きるか。無為に過ごすことに人は耐えられぬ。昨今の老齢者の自殺の増加はそれを物語るものであろう。

私は人間の学習意欲というものは死ぬまで続くものであると考えている。そしてその意欲の底には自己実現の希求があると思っている。自己実現とは自分が自分であるということを、具体的な能力の発現によって確認し得ることであると思う。

以上の四点を総合すれば、学校教育の終了が教育の終了を意味した時代は既に過ぎ去ったのである。言うなれば、人間は生きている限り勉強しなければならないのである。

通常、人間は教育を受けることによって学習意欲をもつようになると考えられているが、私は、人間は教育という営み以前に学習意欲を存していると考える。学習意欲による自己実現を助けるのが教育というものではないだろうか。以上の観点から私たちは今後の教育のあり方を真剣に考えなおさねばならない時期に来ていると思う。

〈全体講演〉　　（午後の部）

〔講演要旨〕

『これからの企業の求める人間像』

北海道拓殖銀行常務取締役　**石黒　直文氏**

最近の企業経営というものは1980年代以降、実に大きな変貌を遂げてきた。かつては、ほとんどの企業に於ける業績が景気変動に大きく左右され、それに伴って企業経営の方もまたその動きに合わせてやり方を考えていればよかったのである。いわば、何でも隣り（他企業）を基準にして考え、隣りが不景

気であれば、自分の企業が不景気であってもそれで安心するといった発想で間に合っていたのである。だから各企業に於ける業績をグラフに表わして比較してみても、業績の低い企業から高いところまで実に整った正規分布の曲線を描いていた。

ところが1980年代に入ると、その様相が大きく変化してきた。産業技術の革新が行なわれ、たとえば情報革命とか、エレクトロニクス革命とか呼ばれ、かつての産業革命の時と同様に総ての企業経営に大きな影響を与えるようになった。しかもそれに伴って人間そのものの思考形態や行動もまた激しい変貌を遂げてきたのである。そうした状況の中で、旧態依然とした従来のやり方にしがみついている企業が果たして激しい時代の流れについていけるであろうか。現代こそ企業に於ける自己変革、自己革新が求められている時代はないであろう。従来の方法で業績が伸びなければ、死にもの狂いで発想を大きく転換し、やり方を変え、工夫していかなければならないのである。つまり1980年代の企業経営に於いては、企業自身がどう自己変革を重ねていくかが最も重要な課題であると言えよう。

たとえば、1980年代の各企業に於ける業績をグラフに表わしてみると、企業としての業績が極端に低いグループと、逆に極めて高いグループにはっきりと分離され、その中間層がほとんどない。しかも時代の変化に対応できず、自己変革のできない企業は、まさに次から次へと倒産の憂き目を見ているのである。かつては業界第一位の業績を示していた企業が、経営不振から倒産していく姿は昨今では珍しいことではない。また逆に、自己変革を遂げ、時代の変化に適応できた企業は、みごとな実績を上げている。

そういった成功例を考察してみると、その企業がいかに時代を先取りにし、柔軟な発想で時代の変化に対応しているかがよく判るであろう。一人一人の人間に的を締り、いわゆる「お客様」がいったい何を悩み、何を望んでいるのかをいかに的確に把握するか。このような点を追求している企業こそ、1980年代に於いて最も求められているものであろう。そうして、これは言い換えれば、人間の幸せというものをよく考え、地域の人々と憂いを共にしながら、一人一人の人間の魂の襞に入り込んでゆくような発想でもあろう。

そういった企業経営のあり方を踏まえて考えてみると、「これからの企業が求める人間像」とは、時代の新しい変化に勇敢にチャレンジし、適応していける人間であると同時に、礼儀正しく、かつ人の悩みや苦しみに涙を流して共に憂えることのできるような、人間性豊かな人材であると言えようか。

〔日程第二日・部会別集会〕

国語部会

〔研究発表〕

①「生徒一人ひとりの主体的学習をめざして」
——「現代文」における小説『舞姫』の読解・鑑賞の実践を通して——

札幌新川　伊藤　正浩

「現代文」の授業では、生徒の学習活動が受動的になりがちなので、作品に対する興味を深め、主体的・積極的に学習させるべく、次のような学習活動の展開を試みた。

㈠　予備学習として作品を音読させ、また範読後に感想と作品の中で最も問題にしたいことをカードに記入させ、類似者で班編成する。

㈡　班毎に課題を与え、作成したレポートに基づき発表させ討議の中で読解・鑑賞を深める。

㈢　そうした討議を通して自分とは異なる考え方に触れることにより、自己の視野を広げさせ、認識を深めさせる。

以上の実践により、生徒は予想以上に主体的・積極的に学習に取組み、「現代文」に対する興味をよりいっそう深め得たと思う。

〔質疑応答〕

▶質問

㋑　北広島・金箱——生徒の主体性を生かした実践に敬意を表するが、生徒の理解の段階を超えた大局的な見解、例えば時代的背景、国家的要請等についての配慮はなされたか？

▶答——最初の段階は、表面的に豊太郎を批判的に見ていたが、鷗外の妹小金井喜美子の書簡、山県有朋のこと、ドイツ女性来日事件の紹介、時代背景・家・国家の問題等の説明を加えると、生徒は豊太郎に理解を示し始め、相沢を責めるようになった。

▶質問

㋺　苫小牧西・石田——音読を課し、時間を計らせることによって生徒が時間にこだわるという弊害がなかったか？　黙読も必要ではなかったのか？　また、作品の理解・共感がその後どのように発展していったか？

▶答——声を出して読むことによってリズムを感じさせ、文章を味わわせたかった。特に時間的に圧力をかけたとは思わない。黙読の方も結果的には五回位読んだことになる。また、作品の中の事象から発展して、近代的自我の目覚め等、漱石、高橋和巳の作品との関連から現代生活との結び付きを考えさせることができた。

▶質問

㋩　池田・東谷——難解な語句がたくさん出てくるが、その解釈についてはどのように対処したか？

▶答——細かい語句の解釈にはこだわらず、それ

らについては各自で調べておくよう指導した。このことは、現代文では、ほかの作品についてもそういう姿勢でやってきた。

②「生徒の声を取り入れる学習の試み」
――回覧批評を柱にした授業実践――

芦別　坂口　毅

昭和58年～60年にかけて、道研の研究指定を受け、その実践の結果である。

ことばによって自分を伝えたり、自己と他者とのコミュニケーションから、自己を見つめ他者を理解する授業は出来ないものか、と考えていた。そして、その一方法として、生徒相互の回覧批評を取り入れた授業を試みてみた。

具体的には、自分たちの意見、考えを書く。クラスにそれが回覧され、他人の批評や感想が書き込まれ、何人もの様々なコメントが書き加えられ、再び自分の手元へ戻ってくる、といった方法である。

59年には、この方法を、短歌、俳句の鑑賞の授業の中で取り入れてみた。そして、60年には、単元の導入時に利用したり、「山月記」を使っての単元では、徹底したグループ学習と回覧批評とスピーチを組み合わせて構造化を試みてみた。

この学習を通じて生徒の意識の中に次のような変化が生まれて来た。

1. 自分が参加しなければ授業は成立しない。
2. 自分の考えや意見は他者が考える糸口である。
3. みんながやっているように、自分もやらなければいけない。

そして更に、自分の声が他人に届く恥ずかしさやうれしさ、他人はどんなことを考えているのだろうか、という興味、それが交錯する中での自分の意見が他人に評価される喜びや他人の意見に感動する素直さ、なども生徒自身の中に育ちはじめた気もします。

手間ひまがかかる、進度の組み立て、等の問題もありますが、生徒たちの重い口を開かせる手段として効果もあがり、生徒たちにも好評のようである。

③「古文を身近に引き寄せる指導」
――文法に片寄らない指導の試み――

江　差　山崎　康臈

生徒にとって、古文は外国語みたいでわからない、と言われる。その親しみの持てない古文を身近に引き寄せるにはどうしたらよいか……いま自分が取り組んでいる方法を述べてみる。

その１．本校の生徒たちが生活している桧山南部は、東北方言や関西文化の影響を受けた土地柄である。従って、ここで用いられている言葉＝方言を考察してみると、古語と現代語とが断絶していないことがわかる。つまり、古語が生徒の使っている方言＝地方生活の中に、現代生活語となって今も生きているのである。

そこで、この地域のことばの特性を生かし、生徒自身にこのことを発見させ、認識させることによって、古文を身近なものへ、と近づけ、興味を呼びおこしてみたのである。

その２．教材「方丈記」を扱った時、冒頭文の幾何学的に構成された文章の構図を分解させる学習を通して、読解、鑑賞の深化をはかっていった。

結果は、文法の苦手な生徒も、興味と意欲をもって取り組み、対句、構成をよく理解していった。

その３．２年生には、「見学旅行」とタイアップさせ、教材の中に出てくる京都、奈良にかかわる表現を抜き出させ、「書中見学旅行」を試みた。

〔質疑応答〕

▶質問

㋑　札稲西・富樫――どの位の数の方言をとり上げ教材化したのか？

▶答――方言の研究そのものが目的ではないので、生徒の耳なれていることばに限定した。

▶質問

㋺　七飯・田川――生徒が日常使っている方言を教材化して、古典学習への導入に利用するのは、古文へ親しみを持たせるための有効な方法として、同感である。

そこで、今後さらに有効な方言の掘りおこしと、古語との関連の上でのより適切な語源の解釈の研究が必要と思われるが、いかがなものか？

▶答――ご指摘の通りで、今後更に研究を深めていきたい。

社　会　部　会

〈現代社会分科会〉

≪主題≫「現代社会」における指導学習過程の総合的研究」

〔研究発表〕

①地域文化の教材化とその活用指導における一考察
～地域の文化財を中心にした「現代社会」における地域調査～

江差南　佐々木憲一

江差町は、750年の歴史を持つ北海道最古の町で、文化財も多い。「現代社会」の授業に「文化財巡検」を計画・実施した。この体験が文化祭・体育祭等に、男子は「沖揚音頭」、女子は「江差追分」の踊りを披露し、郷土愛の心の育成に寄与できたという発表であった。郷土資料集「檜山南部の文化財」が参加者に配布された。

②生徒の学習意欲を喚起する授業のあり方について
～「現代社会」における野外調査学習についての考察～

札稲北　堂徳　将人

前任校（湧別高）で、湧別町地域の野外調査を実施し、その事前準備、調査経過報告、事後指導等の発表であった。中でも、事後指導として、レポート集の作成と地域への配布、発表と討論学習、ビデオ番組の編集（一部、研究会場で紹介した）等確立強

化に努めた。参加者に「レポート集」が配布された。

〔講演要旨〕

「欧米女性事情について」

武蔵大学教授　杉田　弘子氏

アメリカ合衆国では、1960年代以後、女性の社会進出が活発になってきた。「専業主婦」なる用語は、コンプレックスを感じさせるものとなっている。それでは子供をどう育てていくのかとなると、そこは超個人主義の競争原理の国であるので、国家政策としての「保育所」なるものは、一切作らない。子供は「自分の責任で育てる」という。そのために離婚も多く、「女性世帯主」が多くなってきている。一方、ヨーロッパことにイタリアでは、「母性保護」がかなり進んでいて、産前・産後共に3ヵ月ずつの休暇が取れる仕組みになっている。また、その間の給料も100%保障されるようになっている。ドイツでは、子供を3歳位までは、母親が育てる習慣となっているが、最近は、職場に進出する女性も多くなりそのため、自分達で保母を見つけてきて「共同保育」をしてもらうことなどが現われてきている。アメリカ合衆国も、こうした現象が見られるようになってきている等、講師自身の豊富な欧米諸国滞在の経験のもとに話され、大変有意義な講演でした。

〈地 理 分 科 会〉

〔研究発表〕

①「地域学習と作業学習について」

夕張北　太田　尚寛

現在、地理は三年次に週四単位で理科三教科との選択制をとっているため、野外調査をすることが困難であるが、夕張の地域学習を含めた地図学習を取り入れることによって興味・関心を持たせることが可能になってきた。その際、野外調査にかわるものとして、夕張地域の地形的特徴、土地利用、集落の立地、地名の由来、実距離・傾斜などの計測や作業、地形断面図の作成、また前任校での地形模型の作成などについて学習させている。

学習意欲を高める指導法の一つとして、なるべくたくさんの作業を取り入れた授業形態を立案し実施してきている。

②「世界地誌学習の二・三のとりくみ」

清　水　南川　芳一

新地理をいかに教えるかは試行錯誤の連続であるが、数年来、生徒の実態に合わせて自分の住んでいる地域や世界地誌に興味・関心をいだかせる工夫を実施してきた。地理巡検や生徒の手による地域研究誌の作成(現在は現社に継続)、大使館へ手紙を出すことによるグループの発表学習、ビデオカメラを使い各国テーマにもとづいた生徒による創作作品の作成、などにより生徒も興味・関心を持って主体的に参加する授業を目指した。

〈協議〉(1)選択地理にともなう問題とその打開策について…徒歩巡検や土曜放課後を利用したバス巡検の実施、巡検内容を少しずつ現社に移行させる中での地域学習の実践など、意見が出されそれぞれに工夫されているが、巡検の時間をセッティングできない学校もある。打開策として、知識集約型ではなく生徒に啓発する創造的な授業の実施が望まれる。

(2)生徒の興味・関心をどのように高めているのかについて…世界地図を書かせる作業の実施、身の回りの地図など簡単なことから小縮尺の地図への発展、地球儀なども積極的に活用することなどが指摘された。

〔講演要旨〕

「社会化の実践一中国人の生活」

桐朋高校副校長　北原　安門氏

先生の豊富な訪中体験に裏打ちされたポイントをおさえた解説と精選された200枚の貴重なスライドは大変示唆的である。中国社会は基本的には農業社会であり、その農村の中心は、いうまでもなく食料生産である。食料生産と食生活に特に焦点をあて、中国人の生き生きした生活の実態があますところなく報告され、きわめて説得的である。ややもすれば、観念的な中国像や観光的中国像にまどわされがちである昨今の中国ブームを思うにつけ、ふだん着の素顔の中国人の姿がありのまま紹介された点は意義深い。

新しい生産責任制のもとで生産形態は家族経営中心に移りかわって来ており、自由市場は大いに繁栄しているが、大陸各地からその市場へ商品を運搬する輸送手段をみると、新旧共存といった風で、そうした点にも中国のかかえる多様性の1面を感じざるをえない。

〈倫 理 分 科 会〉

〔講演要旨〕

「音楽にみる美意識の比較」

北星学園女子短期大学教授　黒川　　武氏

芸術には「文法的意味」と「文脈的意味」とがあり、美的感覚は意味の認識により変質する。柿本人麿が流刑の地で没したとすると彼の歌は従来の美意識だけでは捉えられない。そして、芸術の捉え方においては「文脈的意味」を重視すべきである。なぜなら、全ての芸術作品は何らかの精神的背景をもつからである。さて、日本人に身近なものとして演歌があり、中には全国民に知られる歌もあるが、その原因を辿ってみると、歌の中に日本人個々の感情一愛、孤独、郷愁等一と内的生活が集大成されていることが分る。演歌は社会と庶民の心情を背負うが故に支持される。音楽及び芸術一般はこのように背景となっているもの即ち「文脈的意味」を認識してこそ理解可能である。そして、大切なことは、同様に欧米の芸術も各民族の心情を背景とするというこ

とである。芸術とは感覚を磨くだけで理解できるものではない。我々は理解の上で「文脈的意味」を見失っていたようである。そして、教える側も理解困難な欧米芸術に固執しているが、どこまで理解可能か疑問である。もっと日本人の心情に近いものを取り上げることができるのではないか。卑近にして理解可能な教材は至る所にあるはずである。

〔研究発表〕

下川商業高校の川原茂雄先生と帯広柏葉高校の戸出秀邦先生による研究発表があった。川原先生は「現代社会における倫理的分野の位置とその具体的展開例」と題して(1)「現社」における「倫理」分野の扱いが現状では本旨から外れていること、(2)選択「倫理」のない学校では「現社」の「倫理」分野の工夫が重要であること(3)具体的展開としては思想家の生き方を中心に教え、テーマ別の授業を試みていることを発表され、「現社」が共通一次から外れたことにより、本来の理念にそった指導が可能であることを述べられた。戸出先生は「現代社会を踏まえた倫理の学習効果を高めるための工夫をどうするか」と題し、(1)「現社」の授業の工夫と実践上の課題、(2)「倫理」における学習指導の工夫を述べられ、具体例として、鎌倉仏教をあげ、「現社」と「倫理」の指導をそれぞれの理念に即して行うことを豊富な資料を用い、発表された。

〔研究協議〕

参加者から自校の実践例を踏まえ、建設的意見が多く出され、最後に、助言の石井勝先生（十勝局）から、両先生の発表に対する所見と、「現社」、「倫理」とも教材の工夫とともに、教材を作る教師の意識・取り扱い方が問題となること、カリキュラム構成上の「倫理」の扱い方、中学校社会科との関連からの「現社」と「倫理」のあり方についての説明があった。

他科目に比べて少人数の分科会であったが有意義な討論が行われたことを付加する。

〈世界史分科会〉

〔研究発表〕

①「基礎的基本的事項の定着化を目指して」

夕張北　亀岡　敏克

高校の準義務化の中で生徒の多様化、中下位層の増加が進む中で、生徒は外国をどのように認識しているのか。歴史を学ぶ上で必要な基礎で「地理」的要素に着目し、歴史上重要・常識的に必要な国50をあげ基礎知識調査を行った。西アジアでは予想通り、またヨーロッパでは予想外に、ともに地理的な認識が不足していることが結果に現れた。このデータを基に、生徒は暗記として歴史を理解しても、地理的な知識の上に必ずしも立っていない。これらを克服するための、①掛地図の積極的利用②白地図を取り入れたプリント学習の実践が報告された。併せて①授業内容の定着②授業態度・姿勢作りへの導入③学習習慣の定着を目的として行っている小テストの報告がなされた。

②「教科新聞の課題」

天　塩　福本　直人

2年目に入った「世界史新聞」作りについて、教師が作る①授業に興味を持たせる②自分の感動を生徒に伝える③授業をフォローするための新聞と、生徒が作る①自ら調べる②文章にまとめる③他人に読ませる④図書館を利用する力をつけさせるための新聞という、2つの性質の違う新聞の発行を授業に取り入れている様子が報告された。また、単に新聞を作り読ませるだけでは、次第にその場限りの興味に陥るようになったため、新聞の記事内容をそのまま授業に生かすための「発問」の工夫と実践が報告された。

両発表とも生徒の傾向がよく紹介されており、また具体的な実践例であったため活発な質疑応答があった。助言者からも、実態調査をもとにした実践、文化圏をおさえた指導、感動のある授業の例として評価された報告であった。

〔講演要旨〕

「近代イスパニア史像の再構築」

札幌大学助教授　五十嵐一成氏

15～17世紀のイスパニア近代史は、特に日本では、19世紀以後の内乱と続くフランコ体制への理解が不充分であるため、正しく理解されていない。プロテスタント諸国で形成された、イスパニアの「黒い伝説」がそのまま受け入れられている。「黒い伝説」とは、①異端審問所の恐怖②新大陸における暴虐の誇張③フェリペIIを南の魔王とするイメージ等である。こうした誤認 —— 教科書でも、そういった方向で記述されている —— に対して、具体的な例をもとに誤解の訂正と再構築を試みようとする講演であった。

授業との関りでは、イスパニアは決して魔女狩りの中心ではなく、むしろ鎮静する側にあったこと、イスパニアの衰退については価格革命が主要因ではなく、帝国維持・カトリック護教のための経済的負担の重荷に耐えかね没落する様子が興味深く話された。

〈政経分科会〉

〔講演要旨〕

「社会契約説の現代的意義」

一橋大学教授　田中　浩氏

人々は自らの自由と安全のために、契約して1つの社会～政府～権力をつくった。インビジブルな社会の統治も、ルールオブローによって可能。課題は権力の民主的コントロール。

その仮説を最初に政治理論化したのがホッブスであり、後の思想家が各時代に適用。彼は、諸階層の対立する当時の限界状況の中で「誰が主権者か」の論点ではなく、「人間の生存」という視点を人々の結集のバネとした。

ロックは「私有財産を守ること」を人々の結集の原因と見て、主権を最高権力性といいかえて議会の優位性を納得させた。

ルソーは公益と私益を同時に考えられる人々の結集した主権＝「一般意思」を唱えた。

19世紀には不平等の矛盾が深刻化。政治的保守主義や偏狭なナショナリズムの胎頭。そこに見られる自然権へのアレルギーと拒否。ベンサムは、自然権を「功利」と言換え「最大多数の最大幸福」を訴え普選へ道を拓いた。

社会契約説300年の教訓は、「自由とは何か」「人間を大切にするとは何か」の近代自然法の原理を、時代と民族性に合った新たな座標軸で理論化し、国民階層自らの問題として、時間をかけて国民的合意をつくるところにあった。日本は今、それをつくることができる条件下にある。

〔研究発表〕

「政治・経済」における指導・学習過程の総合的研究をテーマに、二人の先生の研究発表がなされた。

野幌高校の阿知良渓一先生から、生徒の「新聞スクラップノート」の作成と、自作を含めた視聴覚教材を用いての授業展開から、社会事象への興味関心を高めさせるとともに、発見学習の道を開かせていることが報告された。さらに、評価においては、何をどう評価するか、評価の結果を学習にどのように還元していくか、生徒の持ち味を生かした評価という視点からの発表がなされた。

浦幌高校の浅井節夫先生からは、自作の「講義プリント」を用いての指導により、生徒の学習意欲を高め、主体的に学習に参加し理解を深める授業として効果をあげていることと、「現代社会」の授業で、地域に根ざした学習指導ということから浦幌町のわら工芸である「しめなわづくり」をとり入れた実践例が報告された。さらに、「現代社会」と「政治・経済」における重複する内容については、上述の「講義プリント」がその重複部分の要点をおさえる指導として学習指導に効果をあげていることが発表された。

研発者二人の先生は、「現代社会」と「政治・経済」との関連を的確にふまえ、科目の性格、生徒の実態をよくつかんだうえで効果的な授業が実践されているということを感じさせる発表であった。

〈日本史分科会〉

〔研究発表〕

①「北海道における先史文化学習―地域の埋蔵文化財の活用を通して―」

雄　武　**広瀬　隆人**

雄武町は周辺に遺跡が多く存在し、これらの埋蔵文化財を活用して、地域史研究に取り組んだ。年間計画のなかでは、日本史全体の流れのなかに、地域史学習を位置付けていく方法を取り、地域教材を開発して利用した。

授業時間の他に、自由裁量の時間等を利用し、講演会、遺跡（発掘）見学会等を行った。また、土器製作や調査発表学習等学習形態を工夫し、作業や調査の中で、生徒の北海道史に対する認識を改め、地域の歴史的環境や埋蔵文化財に対する理解を深めるよう配慮した。

〈全体討議〉

地域学習の授業の中での扱い方、自由裁量の時間の問題、調査発表学習の困難点、評価及び到達目標等について質問があり、さらに、高校生の郷土史研究活動、地域史研究の現状、北海道を対象にした資料集編纂の必要性等の発言があった。

②「生徒の興味・関心を高める授業を目指して―プリント学習と主題学習の実践―」

帯広緑陽　**三品　純一**

教師主導型の授業を廃し、生徒の歴史事象に対する興味・関心を高めるねらいのもとに昨年度より、プリント学習・主題学習を進めている。

プリントの作成に当たっては、単元毎の目標を明確にし、導入段階で視角的な理解を促すため漫画等も利用した。さらに、教材の構造が生徒にも理解できるよう配慮すると共に、作業学習的要素を加味したものにした。

主題学習は、生徒の歴史的思考力を深化させ、主体的な学習の場とするねらいで、『金印をめぐる問題』『結婚の形態』『幕末の動乱』等のテーマを実施し、幕末の部分では、生徒の作ったプリントで授業をしている

生徒の反応にも肯定的なものが多く、今後とも継続的に実施してゆきたい。

〈全体討議〉

主題学習のテーマの設定の仕方、グループ学習の取り組み、生徒の学習参加、授業進度等につき質問があり、板書の見直し、主題学習等を科学的にどう体系化し、生徒が発展させていくポイントにするかなどについて発言があった。

〔講演要旨〕

「北海道先史文化の変遷とその特性」

北海道開拓記念館展示課長　**野村　　崇氏**

(1)　縄文時代の日本は、気候変動により、海進・海退が繰り返されており、北海道、本州はほぼ同じ歩みをたどっていた。

(2)　約二千年前、本州は弥生文化に移行し、古墳文化を経て歴史時代に入るが、北海道は続縄文文化、擦文文化・オホーツク文化の併存期の後、アイヌ文化の時代を経て近世に到る独自の道を辿った。

(3)　講演の内容は、貴重なスライドを使った遺跡・出土物についての専門的詳細な説明で参加者に感銘を与えた。

数学部会

〔講演要旨〕

「学習意欲を伸ばすための数学の指導について」

早稲田大学教授　鈴木　晋一氏

演題を見て荷が重いと思いましたが、私自身普段思っていることを話してみます。「数学ぎらいはなぜ生まれるか」内容は作家にアンケートをとった結果を柱に書いてある本で、非常に示唆に富んでいるので参考にしながら話してみます。まず数学の好き嫌いはなぜできるのかを考えてみます。まず第1に学習活動に対する成功失敗経験があげられます。これは個人差があり、他との比較によっておこることが多い。第2に学習活動に参加している実感があるか。私は子供の授業参観に行ったことがあるが、生徒から素晴らしい意見が沢山出ていたが、先生が良い所をうまく引き出せないでいた。もっと「ほめる」ということで活動の高揚を図って欲しい。又私は生徒の名前を早く覚えることにしている。名前を早く覚えることにより学生との親近感が増し、先生方の数学に対する情熱も感じられ教師に対する感情も良くなり意欲を喚起する。又数学が自分の将来にとって役立つのかということもある。経済学部に進学した者に限らず文系理系を問わず数学が将来大いに役立つのだということを授業の時に強調していただきたい。又数学はコンスタントに勉強しなければならない。ただしコンスタントに勉強したからといってすぐその効果が表われてくるものではない。したがって意欲的に学習を続けていくためには数学は楽しく美しいものだと強調して欲しい。昨年から教科書の編集に携わっているが高校の先生は少し細かい事を言いすぎるのではないだろうか。もっと教科書の中の流れを教えて欲しい。

〔研究発表〕

① パソコンを利用した学習指導
多様な生徒の学習意欲の喚起に役立つパソコンの利用。「分数関数とグラフ」について

② 習熟度別学級編成授業の実践
基礎学力の定着を図るために無学年制の習熟度別学級編成を実施

③ 多様化する生徒に基礎学力の充実をめざして
基礎学力テストによる学力把握、コンクールによる授業への活用を考えた。

④ 学習意欲を伸ばすための数学の指導実践
「一次変換による平面全体の移動」をどの様に指導するか。実践を通しての発表

助言者より感想

今回の発表は大変勉強になった。これに甘んじることなく更に研究を深めて欲しい。

理科部会

〈全体部会〉

〔講演要旨〕

「"科学の原点" 言語・イメージ・概念」

京都大学理学部教授　廣田　勇氏

かの有名なモナ・リザの絵を例にあげ、デル・ジョコント夫人という生味の人間をモデルにしてダ・ビンチは作品を残している。芸術家が作品をつくるとき、まづ、モデルがあり、作品が出来る。我々の鑑賞はその結果としておこなわれる。科学の分野でもよくモデルが用いられる。大気の大循環の数値モデルも作られるが、実際の観測値からの現実大気の状態もモデルの以前に我々はもっている。自然現象そのものと、数値モデルの関係は、モナ・リザの絵の出来るプロセスと逆の関係になっている。これは何を意味するか、この解は後にまわすことにして、モデルという1つの言葉のもつ重要性から、科学における言語の大切さを強調したい。我々は国語を学習してきているが、どうも国文学的意味あいが強いように思われる。言語機能としての日本語という見方があってもよいのではないか。日本語の文法として、接続詞（and）と助詞について正しい使用を強調したい。また、A＝Bのイコールには色々なロジックが入っており、私は広田です。私が広田です。は同じイコールでも異っており、方向性があり因果律を考えるとき、大きい意味をもつ。因果律のわかりやすいものとしてニュートンの運動方程式がある。地衡風は気圧傾度力とユリオリの力がつり合った状態で、加速度は0であり時間的な経過がないので因果関係はない。なのに、地衡風が等圧線に平行に吹く理由を説明するために、時間的な変化を取り入れた、地衡風の吹き方の図が教科書等にのっているのを見るが、これは間違いである。因果関係のない「である」と加速度のある「になる」の用語は厳密に区別しなければならない。さらにこれを哲学的に言えば矛盾性と必然性の違いになる。回転している流体に水平に温度差をつけた際の流れについても、外的条件を全く同じにしても出来る波の数は異っており唯一の状態にはならない。同じように図形についても、自然科学ではよく用いられるが、その図が非常によくエッセンシャルにその言わんとしている結論をよく表わしているかどうか真剣に考える必要がある。さて、最初のダ・ビンチの絵にもどるが、彼がモナ・リザという絵をかこうと思ったとき、心の中に美という抽象的な概念ができ、これを具象化するためにモデルを使用したことになる。モデルはあとである。これは科学においては、自然の中にある不思議な現象に興味をもち、観測してある法則に結びつける。これがモデルである。そこから、最終的に美術の鑑賞に相当するものは現代の解釈、大げさに言えば現代の認識を構成するもの、つまり主体と客体の相互関係をいかに自己の中に形成するかということが科学の真の姿である。そう考えると芸術も科学も異次

元のものではない。理科教育とは、ごく身近にある自然の中から、自分の感性を琢き、それを論理的に考えて、身につけることが、人間の心の働きを鍛えることになる。これが私の考える〝科学の原点〟である。

〈理科Ⅰ分科会〉

≪主題≫これからの理Ⅰ・Ⅱの指導はどうあるべきか。

〔講演要旨〕

「理科Ⅰの理念」

札幌平岸高校教諭　野田　四郎氏

62年度の共通一次から理Ⅰがカットされる。僅か四年でこの意義ある科目がカットされる事態を、再考してみる必要がある。指導要領理Ⅰの目標4項目より、特に(4)自然についての総合的な見方や考え方の育成(2)選択理科の基礎、の2項について問題がある。現在の科学は質的に量的に大きく変貌して、従来の分析的方法では有効でない範囲が拡がって来た。しかも簡単に実験できない。データのある部分はスポンサー以外は公表が難しい。従って第三者の批判を受けなければ健全に発達しない。その第三者に科学的教養を身に付けさせるのに高校での理Ⅰは重要な意義を持つ。自然を人間生態学的に捕え、理科の総合的見地から考察できること、又専門家を目指す者には単に専門分野のレベルアップのみならず広い視野をもった人間の育成に理Ⅰはなくてはならない。1970年改訂の二の舞や狭い視野の科学技術からくる色々なトラブルを起こさせない為にも重要な科目である。

●理科Ⅰの必要性についてのまとめ

(1)　社会的機能を持っている現代の科学は人間と自然の関わりを介して扱わねばならない。

(2)　自然界では総合的にみなければ解決できない面が拡がりつつある。

(3)　広い視野をもった専門家の育成と理科的教養を持った一般人の育成。

人間社会は生態系の助けなしには維持できない。以上を教えるのは理Ⅰしかない。

〔研究発表〕

①「理科Ⅰの原点に返って」

美　幌　池田、梅田、渡辺

「理科嫌い」を「理科好き」にさせる試み。低学力の生徒に対する手当を、実験を基盤とした身近な新しい発見で満足感を持たせたり、自作のビデオを視聴させたりして、生徒に定着させている。

②「自然と人間活動との関連を学ぶ環境学習　昨年の理Ⅱの実践報告」

札稲北　八島　庄吾

休みも含め年間の進度計画をたて、手稲地区の農作物(スイカ)、大雪山の自然、手稲山の自然を探りこれを理科ニュースにのせて発表。結果：日常的なものに対する深まり、学校行事への関心を高め、ニュース発表により学習の励みになる。他教科と連繋の基、今後も継続。

③「施設設備、地域の教材化」

札新川　青塚、奥井

実施2年目、青少年科学館の巡検学習、岩石を通して札幌市の地質地形の学習、新川のガン、カモの進化学的考察などさせる。ストーリーを持った授業内容へと模索中。必修の理Ⅰに取上げれるものは今後取上げたい。

④「理Ⅰの新しい構成理念」

札藻岩　山田　大隆

理Ⅰも物・化・生・地的領域の4小項目に分け、その上に積上げるサブシステムとして、原子論、エネルギー保存、進化論、自然階層性、科学の社会的機能にふれ、更に新しい構成理念として、Ⓐ人類生態学、Ⓑエントロピー経済学を入れる。Ⓐはオダム(E.P.Odum)生態学が基になっていると思われるが、理Ⅰを教えるに中心とすべき非常に重要な理念。Ⓑはこれからの時代は地球の開放定常系を保つ為、生産と同時に廃棄を考えなければならないことから、重要な分野である。本校では1人で理Ⅰ全部を教える方針。現在の教科書とは別の藻岩式理Ⅰ指導案を作ろうと考えている。

⑤「地球生命圏の科学」

登別南　丸山　博

法則知識にしばられた科学から人間主体の科学を考え、そこから生徒自ら学ぼうとする気持を生み出すことを目論み、その効果的手段として「賢治のコスモロジー」を導入。

1章　「生命」私達はどうして生まれてきたか。

2章　「気圏」(地球)　どのように生きているのか。

3章　「銀河」(宇宙)　どのように生きていくのか。

の段階に分けて理Ⅰ・Ⅱの内容に対比させ、そして人としてどうやったら生きていけるのか皆で考えていこうとする。

今後の課題：理Ⅰの内容のあるカリキュラム。理Ⅰの理念にそった中味、それに堪える問題集など具体的なものを作り、ぶつけ合ってほしい。

・助言：塩川　信(八雲)　奈良英夫(道工大)

〈生物分科会〉

〔講演要旨〕

「自然から何を学ぶか」

日本野鳥の会　安西　英明氏

(1)　社会学・自然科学・道徳教育等の領域を含めた環境教育という新たな概念

目的は自然環境の保全であるが自然に対する関心を持ち、理解を深める中で達成されるものと思う。環境にかかわる諸問題に対応出来る人材を育てる

事である。

(2) 野鳥を素材とする環境教育

自然環境の中で生活している野鳥を通して自然界の多様性・関連性・不思議性を学ばなくてはならないのではないだろうか。しかし自然に対する理解がされたとしても問題意識、危機感がなければ環境保全という実践には結びつかない。

(3) 環境教育の意義

生態系としての自然を認識する事が、環境教育だけでなく、人間社会での人間の育成にも結びつくものと思う。

〔研究発表〕

①「高等学校理科生物教科書の用語における諸問題について」

斜　里　鈴木　隆一

昭和61年度に発行される理科生物の教科書は12社16冊になっている。しかし各教科書の用語が精選されておらず、また各教科書を比較すると同意用語の不統一性があるのに気付く。これらの事が難解な生物用語を読めない生徒がいる実態と相まって、生物嫌いの生徒が増えるのではないかと思う。各教科書の用語の取扱いを調べまとめた結果は以下の通りである。(1)同じ意味の用語が複数ある(2)外国語の日本語読みの違い(3)漢字表現か平仮名表現かの違い(4)漢字表現かカタカナ表現かの違い(5)漢字の読みの違い(6)日本語表現か外国語表現かの違い(7)その他

以上の様な観点で用語を分類した結果、最低限漢字とすべき用語を決めるなど見て意味が分る表現方法を工夫すれば、かなりの用語が精選、統一出来るものと思う。ひいては生物嫌いの生徒が減ってゆく事にもつながるのではないかと思う。

②「創造性を養うための授業展開＝オオルリオサムシ(Acoptolabrus gehinii) の起源を探る＝」

静　内　井本　暢正

現在の生徒の実態は単発的な知識はあるが単に知識だけで、これらを総合的にとらえる知恵、創造性がない。本研究はオオルリオサムシを通して科学的な思考や深い洞察力を身につかせる感性を養う為、この起源についての推理を試みた。(1)昆虫全般について（昆虫とクモさえも区別出来ない生徒がいる実態であり、まず昆虫の分類等について学ばせる。)(2)オオルリオサムシに関する事(3)オオルリオサムシの本道における分布と地理的変異　(4)世界におけ同属種の分布　(5)オサムシ科における小進化　(6)オオルリオサムシの進入経路とその時期（本道への進入経路について）　(7)オオルリオサムシの起源

以上の様に１つの事実を地学的、生物学的にからませ、次々に考えを拡大させて色々な方向から考えることが出来るものと思う。

〈地 学 分 科 会〉

〔講演要旨〕

「気象と衛星観測について」

京都大学理学部教授　廣田　勇氏

IGY（国際地球観測年）1957年～58年にかけて、国際的な協力のもとに地球全体を観測しようとのプロジェクトが出来、スプートニク１号が日本の上空を飛ぶようになった。非常に夢のあるエキサイテングな時期であった。衛星についての技術が進み、一番、最初の気象衛星は、TIROS で可視及び赤外線観測衛星の意味で1960年４月１日にあがっている。気象関係者にとっては記念すべき日として、International weatherman day といっている。その後、多くの衛星がつくられ、実用に供されたが、静止衛星 SMS, GMS などで地球を丸ごと見られるようになったが、高さ36,000km なので露出時間が多くかかり、不精確さは、いなめないので、ほぼ、両極を通る軌道を約100分間でまわり、回転している間に地球が自転しているので、NOAA は地球全体が観測出来るようになった。NOAA は約2,800km の幅で、地表を帯状に観測しその精度は上った。これで、大気の立体構造を把握するために Remote sensing（遠隔測定）という考え方を導入し、CO_2の吸収が15μm 付近の赤外波長の関数になっているのをつきつめ、高さによる温度分布・圧力分布、エネルギーの流れ等多くのデーターが得られ、地球物理的な関心をよんでいる。また、北半球と南半球における大気の流れや温度分布等もデーターから読みとれるし、南半球の夏の方が北半球の夏より少し暑いこともわかるし、さらに、地球が太陽のまわりを楕円軌道で１周していることもこれにより証明出来る。このように、多すぎるほどのデーターをどのように整理して、地球の何を知ることが出来るかが今後の問題として、のこされている。その１つとして海水は潮汐現象により波をうつ。その上にある大気にも似た現象が起きないかを考え５ケ年の時間をかけ、やはり大気も波うつことが示されている。衛星が与えてくれるデーターから地球の何がわかるかについて、パイオニア精神で取りくんだが、現在では、色々なものを取り出すことが出来るようになった。地球科学のおもしろさは、ある現象があり、それに対して、我々が何を知りたいかとの動機があり、手段があり解析して地球の本当の姿を見ることにある。

〔研究発表〕

①「喜茂別周辺の地表上部をおおう火山砕屑物について」

喜茂別　中嶋　紀男

郷土の自然を教材化し、生徒に身近な自然のあり方を認識・理解させるために、取り組んだ研究であり、羊蹄山を中心として東方地区を６ケの地域に分け、70ケ近くの柱状図を示し、その解析の緒についているという、非常に精力的でバイタリティに豊んだ研究をスライドを見せながら発表された。この調

査研究は今後もひき続き実施されるとのことで、今後に大きな期待をよせたいと思います。また理科センターの藤田先生より洞爺中学校の香川先生の御指導を得るよう助言があった。

〈化 学 分 科 会〉

〔講演要旨〕

「水質をどうみるべきか＝
調査と予測の実例を見て考える＝」

北海道大学工学部教授　那須　義和氏

1. 水質とは、その水の持つ存在状態に関する性質（いわゆる水象）を除く他の物理学的、化学的、生物学的な性質を言う。
2. 水質の評価には、感覚的な評価（外観、周囲の状況）と水質的な評価（目的への適合性、排水の規制等）がある。
3. 水質調査 ⟶ 分析 ⟶ 解析
4. 3つの環境相…開墾 ⟶ 開拓 ⟶ 開発
5. 水質汚濁は目立つところではほとんど改善されて快適な環境になっている。
6. サンプリングの手順は毎月1回行い水質の変動をチェックする（COD＜0.5mg）
7. その後スライドにて水質のメカニズム等を大変わかりやすく説明されました。

〔研究発表〕

①「楽しい化学のための場と教材」

南　幌　田辺　彰宏

南幌高校の概要説明の後、〝観察・実験〟に対する視点を3つ述べられ実験例を説明しました。

○角砂糖の燃焼と触媒
○巻き取りpH試験紙を用いたpHの測定
○アンモニアの噴水実験

授業中はマイクを使用し指導を徹底している。

②「ドライアイスを用いた実験あれこれ」

滝川西　中村　隆信

ドライアイスを持参して低温状態におけるゴム（天然）の弾力性とドライアイスによる液性の変化を実験にやって説明されました。

③「銅（II）イオンの反応について
―硫酸銅（II）の結晶水と銅（II）の
錯イオンの実験―」

幕　別　菅野　優

実験プリントに沿って

○結晶水について
○銅（II）イオンの反応について

以上説明されました。

④「実験と評価」

札平岸　笠岡　正紀

観察・実験を通して学ぶ化学の授業を開校以来の実践報告の後、北理研実験書の教授フローチャートを中心に実態報告がありました。

〔質疑応答〕

㊐3について阿寒高校　本多先生

エタノールで溶けないで色がつかないのではないか（CuOになるのでは）

㊒そのようなことはなかった。

・助言者より

（A）宮下正格先生（理科センター）

小・中・高校の指導方法を勉強したほうが良いのではないか。

田辺先生…生徒の質を考えた実験である。

中村先生…演示実験がダイナミックな実験である。

菅野先生…実験項目は良いがNaOH溶液のチェックをすればよい。

笠岡先生…フローチャートは大変よい。
OHPもわかり易い。
小テストは難しいのでは

（B）大石　博校長（美幌高校）

疑問をいだいて取り組めばよい

正四面体 ⟶ 正八面体（銅イオン）

（C）前川陽一教頭（江別高校）

1回の実験で深く行ってほしい。

〈物 理 分 科 会〉

〔講演要旨〕

「水の物性（氷を通して物理を教える）」

北海道大学教授　前野　紀一氏

先生は、雪や氷は我々にとって非常に身近なものであるが、その物理的性質は非常に特殊なものである事を具体的な例をあげて説明された。まず第一に、人間の生活圏が水、氷、水蒸気の三重点にあること。第二に氷の結晶構造は六方晶系であるが、氷が水より軽いのは、酸素原子間隔の問題ではなく、配位数が氷の方が水よりも小さい事によるのであること。第三に雪が固くなるのは焼結によるのであり、雪にとって0℃付近はかなりの高温であること。第四に氷の物性にとって水素原子が重要な役割を果している事を氷の電気的な性質（氷の直流電気伝導が半導体並である事）を解明する事によって明らかにできること。最後に、結論として、身近な雪氷が、11種類の氷の相の中で最も特殊な物性を持つものである事を説明されました。

〔研究発表〕

①「"FANTASY"としての相対論(1)」

登別南　丸山　博

相対論を(1)物理の理論とは何かを考えたり、(2)古典論をより深く理解するための機会として授業に採り入れた。また、これを通して、生徒が自分の内的世界を拡げてゆくようなものにしたいと願っている。今は試験後の「お話」程度のものとして授業をしているが、生徒は興味を持ち、資料を求めに来る者もいる。

②「非直線抵抗に関する実験」

札幌北　伊藤　四郎

生徒が実験に興味を持ち、物理を身近に感じさせるために、電気抵抗の実験で電球やシャープペンシルの芯を用いた。芯に電流を流すと生徒は感動し、積極的になった。さらに金属、非金属の抵抗の温度依存性を調べさせ、芯の温度計数 $\alpha = -0.003(1/K)$ を得た。

③「定時制における物理教育はいかにあるべきか＝小人数を利用した体験的物理実験の試みについて＝」

斜　里　穂積　邦彦

生徒の興味関心を考慮し、生徒数が少い事を生かして次のような実験をしている。
ア．速度と加速度(各人の30m走を測定)。イ．重力加速度(ボールを真上に投げ、滞空時間から求める)。ウ．ボイルの法則(注射器によるP－Vの測定)。エ．シャルルの法則（注射器によるT－Vの測定)。オ．大気圧(ストローで水を何m吸い上げられるか)。カ．光の屈折(レーザー光利用)。キ．電気抵抗、半導体（発光ダイオード利用)。ク．積雪の観察(断面の着色、観察)。ケ．つららの観察(薄片を偏光板で挟んで観察)。コ．湖の氷と海の氷（偏光板による観察)

〈質問〉偏光板で氷が着色する理由をどう説明しているか

〈応答〉氷がいくつかの部分からできているからと説明している。光学的な説明はしていない。

④「高校生のための原子物理学」

札稲北　高木　伸雄

6名によるグループ研究である。現在では原子物理の分野は授業でも教科書でも少ししか触れず、相対論に至ってはほとんど扱っていない。しかし、我々は原子に関するさまざまな問題が現在の科学において重要な位置を占めている事から考えて、物理の学習において、原子に関する扱いをもっと重視すべきであると考えた。教科書のレベルで体系的にまとめ、読み易い内容の副読本にまとめたい。

保健体育部会

〔研究発表〕

①「『種目選択』を実施して」

小樽桜陽　成田　穣

従来よりも運動種目の選択幅が大きくなり学校の実態や男女の特性、生徒の能力・特性を生かした指導ができ、次の二点をねらいとして実施に踏み切る。

1．興味、感心、得意種目を実施することにより、得意種目、得意技を身につけさせ、運動に対する興味を深めさせる。

2．選択種目も個人的・集団的スポーツからそれぞれ選び、その特性を理解し、楽しく実施できるようにする。

このように生徒の個性・能力に応じた活動を展開することにより「生涯スポーツ」へとつながると考える。

②「運動の生活化をめざして」

森　　池田　好行

各生徒に運動の興味を持たせ、いかに運動をさせるかである。卒業後の健康作り、体力作りができるような体育授業が必要である。その為に、生涯を考えたカリキュラムが大きな問題となる。体育授業での内容を生徒が知り、自ら学び、進んで行ない社会生活に運動を生かすことができ、これが生涯に通ずると考える。我々は、生徒の欲求に対し、満たす必要があり、これが生涯体育につながる。

③「持久走授業による体力つくりについて」

大　樹　侘美　　靖

体力・健康についての意識の高揚に伴い、本校においても教科体育に持久走を授業に入れている。持久走・マラソンが身体、精神面にどんな効果を与えるかを3年間にわたり調査し、現在実施している授業形態・安全指導が妥当であるかを、他の運動種目との比較検討を加える。結果、生徒は苦しいながらも意欲的に参加している。全身持久性の面では、1年時にかなりの向上が見られ、2・3年時では持久走授業の期間をはさんでの指標であるステップテスト値が向上している。

〔講演要旨〕

「現代社会とスポーツ」

中京大学学長　梅村　清弘氏

スポーツ社会学の課題は、スポーツを個人的なものとして取り扱うのではなく、社会的側面から究明しようとするものである。物質社会において、心がおろそかにされ色々な問題がとりざたされている昨今、スポーツが重視されるのである。人間的接触が多ければ、人間性が豊かになる。現代社会では人間性を高める場が乏しい。そのためにはスポーツを通して協同作業、協同目的を達成してゆく。これは社会教育の代行であり、人間性を高める場でもある。労働はもはや人生の主流ではなくなり、余暇がかって労働が占めていた地位につこうとしている。現代社会のしくみをよく把握して行動しなければならない時に来ている。スポーツこそ社会とのかかわりが重要視される時代である。

芸　術　部　会

〔講演要旨〕

「雪と氷と人と」

北海道大学低温科学研究所教授　若濱　五郎氏

科学・芸術ともに美しいものの感動は共通しているのではないかと思われる。研究者は芸術家でなけ

ればならない。

最初は先生のまねごとからはじまり、次第に独自の世界を作りあげていることから考えると、科学においてもいろいろの面で芸術と共通すると思われる。

雪を美しいととらえるのは暖国人の感覚である。雪国（北陸・北海道等）ではそうではない。美しいものであっても大量に降ると雪害があり雪利はない。ともに雪害、利害は同居しているのです。

文明には「良」「悪」がある。

人間自体が不完全なものであるから、理想として完全な効率100％のものを作れると良いのであるが、それが出来ずに公害などが生れるのであるから、完全なものは出来あがらない。これは自然界の鉄則であり完全なものはない。

害――雪害、雪崩、欠漏、交通切断などの源となる。

良――雪どけ水～水、河。
地下水～表面にでるとオアシス
人類にとってはなくてはならない水の源となっている。

さらに地球が温かくなると氷河がとけて土地が狭くなり、冷たくなると土地が広くなるという結果を生むのである。

このように、人類にとって雪は文明と大きなかかわりをもっていることがわかる。そのために、南極基地等でいろいろな国が気象などの研究・調査をしている。又、機械化時代に入り次第に二酸化炭素が多くなって来ているがこれからの大きな問題となってくるだろう。

〈音 楽 分 科 会〉

音楽分科会は桧山北高校の佐藤公之先生が「視覚教材と鑑賞ノートを使った鑑賞指導」をテーマに研究発表をされた。先生の鑑賞指導における実践は、既に定評のあるところであり、その長年にわたる積み上げを著した厖大な資料とスライドを併用し、学校の概要、授業における諸問題、評価などとあわせてテーマについての発表がなされた。その要旨は、従来のレコードを中心とした鑑賞からスライド、ビデオ、レーザービジョンなどの視覚教材の利用と鑑賞ノートの活用により「基礎的知識を補い、興味と関心を持たせて授業に集中させる」というものであり、今後の鑑賞教育に貴重な指針を与えてくれた。

また全体討議では、授業における歌唱、器楽、鑑賞、創作など各分野の占める割合についてや、評価、教科予算と設備、音楽の求める表現活動とはが活発に話し合われ、最後に浪花先生より助言をいただき分科会を終了した。

〈美 術 分 科 会〉

美術分科会は札幌厚別高校の武石英孝先生より「これからの芸術」と題してユニークな美術教育実践の研究発表がなされた。

先生の発表は生徒の陶芸、デザイン、鉛筆デッサンの作品を見せてのすばらしい内容と大きな問題を提起していただけに、参加者一同に大変興味と関心をあたえ、質疑応答では教材の内容、予算施設の面、父母の反応等と次々と質問がおこり、続いておこなわれた意見交換ではそれをステップとして芸術教育の本来のあり方から生徒の意識と意欲の問題まで広範囲にわたって話しあいがもたれた。

その間２時間ほどであったが、なごやかな雰囲気の中にも数多くの先生方より美術教育に対する考え方や指導実践が紹介されたことは、互に今後の美術教育の歩みのうえで、大いに参考になったように思われる。

最後に助言者の田村宏先生より貴重な助言と感想をいただき終了したのである。

〈書 道 分 科 会〉

書道分科会は千歳高校の佐藤弘教諭により、千歳高校においては、書道室・準備室が共に無いため、授業は生徒の躾の第一歩から始めなくてはならない現況から始まり、現代社会は、とかく自己主張が先立つ時代だが、寡黙の重要性を知らせるために石を素材とした学習を取り入れて、生徒の内面的な変貌を願う研究発表と、分科会会場を埋め尽す生徒作品の紹介があった。

石を用いての発表は、クイズ形式を取り、石の持つ美しさ、強さを示す授業展開の方法を知らせるために実物の石27個を展示して説明され、その学習方法における今後の課題をも提起された。

又、生徒の作品については、長期休業中の課題として生徒が提出したものから、心打たれる作品を選び学校祭に展示したものであり、暖かみのある表現とデリカシーを求めた表現の二種が展示された。石、作品と共に佐藤教諭の熱弁が分科会場を圧倒していた。

英 語 部 会

≪主題≫「生徒の学習意欲を伸ばす英語の授業展開を求めて」

〔講演要旨〕

「コミュニケーションを目指した英語教育」

大妻女子大学助教授　**石井　敏氏**

1．転換期の英語教育

現在次の諸条件の変化から英語教育は転換期にある。(1)一般の人達の社会的要求。(2)生徒の要求。(3)教科書の変化。(4)教授法の変化。(5)入試問題の変化など。

このため従来の訳読式から「コミュニケーションを目指す英語教育」に変化している。しかし英語教師に意識の変化は見られない。

2．外国語習得の目標は異文化間のコミュニケーションを目指すものである。

異文化間の相異をのり切る手段として、共通語、

すなわち英語を使用したい。

3. 「言語能力」は「コミュニケーション能力」のほんの一部にすぎない。

言語能力とコミュニケーション能力を結びつけるため次の事柄は大切。

(1) 言語教育の目標としてコミュニケーションを明確に位置づける。

(2) 言語能力とコミュニケーション能力は別であることを認識する。

(3) 機械的暗記（rote memorization）や機械的訓練（mechanical drills）のわくを一歩出た指導が望まれる。

(4) 言語教育において、知的活動、動機づけ、態度・興味・関心、体・手足を動かす等の重要さを再認識する。

4. まとめ

(1) 英語によるコミュニケーション能力をいかに伸すかが今後の課題。この観点から、英語教育、研究面に新しい目を向けるべきである。

(2) 英語教育は「印象論」から「実証的研究」に向うべきである。そのため次の一連の流れを常に心掛けたい。a.問題点の明確な把握　b.原因追求　c.解決策の計画・実践　d.実践結果の整理・反省

〔研究発表〕

①「長文読解への模索」

旭川北　**増田　秀通**

大学入試の長文問題を生徒が理解するようになるためどの様な指導をしているか。「接続詞」をポイントに問題集の英文を垂直に分解し、講習用テキストに編成した取り組み。

②「協力教授法（二人制）試行の実践報告」

江差南　**郷内　　修**

授業についていけない生徒のフォロー・アップのため、チーフ教師とサブ教師の二人で授業を担当。チーム・プレーによるきめの細い個別指導の実践報告。

③「リーディング(スピーキング)とリスニングを中心に」

室蘭清水丘　**渡辺　祐二**

定時制生徒の学力低下傾向に対し授業を次の構成で指導。(1)ポピュラー・ソングでの聴く力。(2)フォニックスによる単語・発音。(3)教科書での読みと文構造指導。

家　庭　部　会

≪主題≫「これからの家庭科教育を考える」
ー男女が学ぶ家庭科のとりくみー

〈期日〉　昭和61年１月10日（金）
〈場所〉　札幌市民会館
〈参加人数〉　130名

〔講演概要〕

「家庭一般男女共修の実践」

長野県立須坂高校教諭　**中島　百子氏**

共学「家庭一般」の実践および長野県における男女共学のあゆみを参照。須坂高校は、大正12年創立で60年の歴史があり、地域では有名校に属し男性っぽい学校であると学校の紹介があった。

質疑応答は７名の先生方からあり、特に「家庭一般」共学２単位の上にたって、（資料16Ｐ）さらに女子２単位はどのような内容構成なのかに対して、「実際には女子２単位は実施していない」。と返答ありました。

〈総会〉

事務局より
・昭和59年度事業・収支決算報告（承認）
・前年度事務局より退任の挨拶（札北　大森）
・昭和60年度事業計画・予算案（承認）
・昭和61年のサブテーマについて、支部役員会（９日）で承認を受けた旨報告
・昭和61年度研究紀要第24号について、資料９Ｐの通り道南・後志と承認。

その他全道地区支部における取り組みや活動の報告。

〈研究報告討議〉

(1) 「研究主題」のテーマ設定について事務局より説明

(2) 研究経過説明（家庭科教育を考える）
検討委員会長札北高大森先生から家庭科教育の理念を整理し、資料のとおり説明をする。

(3) 発表者は大会要項49Ｐ～51Ｐを参照

(4) 研究内容について討議
「男女で学ぶ家庭科」について何らかの機会等で話し合った支部は、小樽商と日高・十勝・網走管内の報告。昨年度ご講演された磯村先生の概略について事務局から説明。

質疑応答には多数の先生が意見をのべられ実り多い会であった。

〈まとめ〉指導と助言

指導主事　**佐藤　　祝**
千歳北陽高校長　**市毛　昌一**

家庭科教師は広い視野に立ち愛される人間にならなければならない。更に研修を深めて欲しい。

農　業　部　会

〔講演要旨〕

「農業におけるバイオテクノロジーの利用」

農水省農業生物資源研究所長　鳥山　国士氏

1972年ローマクラブの指摘を待つまでもなく世界人口が成長を続けるならば50年後には食糧危機が現実となるであろう。これを少しでも改善するため農業は革新的技術の導入により生産量の飛躍的増大が必要である。バイテクが農業に寄与する分野は、作物育種をはじめ生物農薬に至るまで幅広く想定されるが、組織培養、細胞融合、組換えDNAの研究利用が現在最も活発である。従来の技術では不可能であった遺伝変異の作出および種苗の大量増殖などにバイテクの主要な役割がある。以下100枚余のスライドにより胚・胚珠培養、葯・花粉培養、ウイルスフリー株の作成、急速大量増殖、遺伝質の保存、細胞融合、細胞雑種法、組換えDNAその他の各項について研究開発の実態を解説するが、結論として、今後農業生産の飛躍的向上の担い手である育種へのバイテクの寄与は、ますます大きなものとなろう。農業に利用できるバイテクも胚培養、葯培養、組織培養はすでに実用化され細胞融合も実用化が近い。これまで地球上になかった新しい作物が創り出される可能性もあり、耐病、耐塩、耐寒性などの農業特性も飛躍的に向上するであろう。

しかし人類が農耕を開始してから今日まで重ねられた従来型の育種体系の中に組みこまれて初めて実用化への道が開かれるのである。また、バイテクが単なる技術の側面からの評価により企業利益が優先することは厳にいましめなければならない。発見された自然の神秘がもうかる秘密になってはならない。迫りくる食糧危機を回避するため世界のあらゆる分野で真剣に対処することが肝要である。

〔研究発表〕

①「『栽培環境』の指導について」

岩　農　押田　　勇

指導内容、方法に十分の検討を加え第3学年で4単位時間授業を展開、特に①実験、観察の事前、事後指導が十分できるよう週時間を配分し②小グループに分け③季節的制約を受ける内容については記録簿を活用して学習のつながりを保ち④視聴覚教材、プリントなどを活用して精度を高める工夫を重ねている実態が報告された。

バイテク・コンピュータ利用等の教科指導が展開されるすう勢にある今後、この科目はますます重要性を増すと考えられる。実験カード、実習の手引きの集大成、実習農場の運用等に配慮し指導をすすめることが大切であるとの助言を得て協議を終了した。

工　業　部　会

〔講演要旨〕**「ニューメディア時代について」**

北海道電気通信監理局長　佐藤　允克氏

電気通信、新聞・出版等のメディアのうち、既存の電話，テレビ，新聞については伝達手段としても、産業的にみても大きな力であり、今後もメディアの中心であることには変わりはない。

しかし、近い将来、多彩なニューメディアがつぎつぎと登場し、家庭・経済・地域社会を一層、効率的に変容させることになる。

既に一部実用化されているものを含め、電気通信分野での主なニューメディアを列挙すると、(1)キャプテンシステム、(2) ISDN、(3) VAN、(4) POP システム、(5) IC カード、(6)衛星放送システム、(7)文字放送、(8) PCM 音声放送，(9)高精細度テレビジョン放送、(10)静止画放送、(11)ファクシミリ放送、(12)都市型CATV などがある。

このうち、キャプテンシステムはテレビ受像機とコンピュータセンターを電話回線で結び、多様な画像情報を提供しようとするものであり、一部は既に実用化されており、今後最も発展の可能性のあるものの一つである。

日本はニューメディアに関しても最先端の技術を保有しているが、やがて来る高度情報社会への円滑な移行を図るため、モデル都市を指定し、各種ニューメディアを導入、試行し、その効果、影響を事前に検索する、いわゆる「テレトピア構想」を積極的に推進しているところである。

≪主題≫時代に即応する工業教育のあり方

〔研究発表〕

①「『工業』における計測制御の指導法」

旭川工　吉田　　洋

今後は自動化機器の開発、保守等を業務とする技術者の需要が多くなり、これに対応できる工業教育が必要となると思われる。したがって本校では、パソコン計測制御の実習に入出力インターフエイス、LED 回路、D/A、A/D 変換回路等を自作し、教材開発とハード・ソフトの両面での指導を試みている。

②「より実践的な土木教育の展開をめざして」

北見工　海老名　優

ここ数年の建設業界の不振の影響を受け、生徒の質的低下がみられ、それにともなって教科指導、進路指導等に大きな問題点と困難さをかかえている。したがって、「より現場的で実践的な土木教育の展開」をすすめることが必要であり、専門的に低レベル内容であっても現場ですぐ活用できる基本的な知識や実践力を身につけさせたい。

③「工業数理の自作テーマについて」

苫　工　宮川　史章

工業数理への興味・関心を深めるため「石油備蓄タンクについて」とか「格技場に作用する荷重・外力」、「苫小牧市の人口予測」など身近で地域性のある題材を取り入れ、電卓やパソコンなどを使用させながら、作業量を多くすることにより、その内容を深め、定着化を図ろうとしている。

商　業　部　会

〔講演要旨〕

「海図なき時代の経済と社会生活」

北洋相互銀行社長　武井　正直氏

今の日本がどのように発展してきたかを考えてみると、現在、日本人１人当たりの国民所得は10,445ドル（約200万円）、世界第１位である。おしんの時代の生活水準は現在と較べて約20分の１、紙の消費量も、やはり20分の１である。現在の中国は日本と較べて紙の消費量は30分の１である。また、日本のエネルギーの消費量でみると３千Ｋカロリから10万Ｋカロリ（現在）に増加している。

そのように生活水準の向上した理由は、次の３点にある。その１、平和であったということ。その２、世界経済が安定していたこと（①固定相場制がとられていたこと、②関税貿易一般協定が守られていたこと）。その３、日本人が勤勉で、教育水準が高かったことである。

戦後から昭和45年頃まで、世界経済の安定の要因に基づいて、海図のある時代を歩んでいたが、昭和46年頃より国際経済の安定の要因であった固定相場制と関税貿易一般協定が崩れて、現在の危機が生じ、今は海図なき時代にさしかかり、どのようにして私共が暮したら良いかということである。

昭和19年、イギリスのケインズが再び世界戦争を起こさせないために、国際通貨基金と関税貿易一般協定を作った。当時のアメリカの国力は日本の30倍であったが、現在のアメリカと日本の国力の差は２倍に縮少した。世界中の国々が力の均衡化してくると統制力がなくなり、日本も戦後、強力なアメリカ経済の下に動いていたが、現在はアメリカの枠組みの中で動かなくなった。しかし、先に述べた３点のいずれが欠けても、元の生活状態に戻らないという保証はない。

現在アメリカとの間に貿易摩擦が生じ、アメリカが債務国に転落し、日本が債権国になっている。日本が債権国になったということは権利と力があり、当然に義務も履行しなければならないし、貿易の自由化も当然しなければならない。日本は貿易立国であり、外国貿易により私共の生活の糧を得ているが、今後とも通貨価値の変動が生じ、通貨引下げ競争と日貨排斥運動がおこらないとは限らない。海図なき時代に生きるには自分自身で物事を考え、弾力的な思考力ができて、ぶたれても、なお生き伸びる燃力のある人、情報をキャッチして、正しく日本経済を栄えさせ、生活水準を向上させてゆく能力のある人に教育してほしい。

知識は８割程度では何の役にもたたないし、知識は10割でなければ駄目である。このことは企業が行う。皆さんは生徒に対して、物事を考える力、物事を学ぶ心を養う教育をしていただきたい。また、北海道が少しでも良くなるように、皆さんが１人でも良い人を育て、共感を覚え、命を燃焼させるような人を作っていただくことが大切である。

〈第　１　分　科　会〉

≪主題≫「今後における商業教育のあり方」

◎パソコンを利用しての学習指導

〔研究発表〕

①「パソコンの導入と対応」

札東商　森下　繁義

(1)　導入機種選定までの経過説明

(2)　指導上の留意事項

1．アルゴリズムの追求、流れ図重視

2．プログラムのSAVE、結果の提出

(3)　指導言語について

1．授業効率（指導内容重視）

2．操作重視

3．就職先での作業内容

以上の理由からBASIC言語で指導

(4)　主たる利用科目

情報処理及び数学の一部

(5)　指導目標

1．情報処理の基本的な考え方及能力をつける。

2．体験的利用

3．データ通信の理解

②「パソコンの導入から稼働までと問題点」

室蘭商　山田　紀雄

坂本　弘幸

(1)　導入機種選定から現状の説明

(2)　指導上の留意事項

知識と活用の二面から指導

(3)　指導科目

情報処理Ⅰ、Ⅱ、総合実践、マーケティング、簿会Ⅰ

(4)　指導言語

REPORT及びファイルの処理からBASICのみでは疑問

(5)　指導者のレベル向上

〔助言者から〕

(1)　全校体制での取組み（校内研修など）

(2)　情報処理センターとの連携

(3)　パソコンの広範囲な利用

(4)　導入に対する心がまえが必要である。

〈第　２　分　科　会〉

◎進路指導のあり方―現状と課題

〔研究発表〕

①「地域中学校との連携のあり方について

＝中高一貫した指導はどうあるべきか＝」

富良野　辻　　美通

58年度に文部省の研究指定を受けたことを契機に中高連携による一貫した進路指導の必要性の認識を深め、中高の共通理解を図り、生徒の自己理解を促し、目的意識を高め、主体的に適切な進路選択がなされるよう、次のような連携を図った。

(1) 進路指導を通じての連携のあり方
目的意識を持たせる指導（中高懇談会）
(2) 学習指導を通じての連携のあり方
学習意欲の向上と自己実現を図る能力の育成（公開授業・教科別研究協議会等）
(3) 生徒指導を通じての連携のあり方
家庭・地域との触れ合いを通した中高連携（中高生徒指導連絡会・校下各地の連絡会）
(4) 情報資料を通じての連携のあり方
実態を理解し中学校での進路指導の資料となるよう本校の「進路ガイダンス」・「進路だより」等の送付
(5) 中学校の父母との連携のあり方
中学校父母の正しい進路指導への理解を求めて（高校教育懇談会・高校の授業参観・高校教育内容説明会・高校進学説明会）

②「高校生の就職環境の変化にともなう進路指導について」

帯広南商　佐藤　勝彦

・現状の把握

(1) 父母や生徒が技術革新・経済の変化・社会政治の変化・国際政治の変化によって企業の経営環境が、ひいては就職環境が変ってきていることを適確にとらえ、自己の進路問題を考えるところまでに、指導することの難しさを痛感している。
(2) 帯広・十勝は求人数の減少・就職希望率の増大、典型的な地元志向・雇用吸収力の体質的弱さ・高学歴側への採用切換え等の厳しい状況にある。

・対応策

(1) 就職環境の変化についての「父母と教師の勉強会」を積上げ方式で来年度より実施するよう準備をしている。
(2) 基礎基本のしっかりした生徒の育成をかかげ、漢字コンクールや挨拶指導を実施している。
(3) 個別指導の徹底を図るため普段から生徒理解に努力する。

〔助言者から〕

社会の経済構造の変化にともなうパートの増加や職業観の変化の中で目的意識の薄いまま進路を安易に決めるのではなく、自分で進路を選択することができるように生徒の能力にあった指導、人生教育（生き方の指導）、各種の研修を通じて生徒父母に目的意識を持たせることが益々必要となる。

水　産　部　会

〔講演要旨〕

「水産教育をめぐる諸問題」

文部省初等中等教育局職業教育局

教科調査官　勝木　　茂氏

昨年９月発足した「教育課程審議会」の審議経過及び内容と臨教審の関連などを説明し、変化の激しい現社会の学校教育の方向を示唆された。また中学卒業者の94％が入学し、多様化している高校教育の在り方及び中途退学者の問題などを含めて国民教育機関としての高校教育の役割について述べられた。

さらに高校に於ける職業教育、とりわけ急速に移り変っているわが国水産界の厳しい現状に対応するための、これからの水産教育の在り方、特に教師の心構えを説かれ、全国の主な水産高校の入試の平均点をみて、必ずしも成績の良い学校が教育効果が上っているとは限らず、逆に成績の悪い生徒でも教育の仕方によっては、それなりに成績が上げられることを強調し、教師の一層の努力と結束を促された。

〔報告〕

1．産業教育指導者養成講座参加報告

南茅部　石尾　敏文

「動・植物プランクトンの大量培養技術」等の栽培漁業に関する研修内容が報告された。

2．産業教育実技講習参加報告

函館水産　和野　博樹

「コンピューターのプログラム作成に関する諸命令」等について研修内容が報告された。

3．産業教育教員長期実技研修報告

厚岸水産　川口　隆一

「マイワシによるマリンビーフの製造・利用」について研修した内容が報告された。

〔研究発表〕

≪主題≫「これからの水産教育をどう進めるべきか」

①「新任水産教員が直面する種々の問題について」

恵　山　田中　邦明

ともすれば、生徒と同様、地域水産業の厳しい現況に、将来への展望を見失いがちの自らを反省し、又、水産に限らず学習意欲のないように見える生徒も本当は自分の将来のために学びたがっていることを知った。水産の教育としてやらなければならないことは、生徒に将来への具体的展望を与えてやることであり、そのためには、1)水産業の素晴らしさ、生産の喜びを感じさせる実習や教材の研究と導入、2)指導法・評価法の研究、3)地域の水産業の理解と課題解決への取り組みが必要であると発表された。

②「総合実習の効果的な指導法」

函館水　澤辺　修三

総合実習において、クラスを４班編成にし交替制で工場長１名、班長４名を選ばせ実習に当たらせる「グループ学習」が、生徒の自主性や積極性を引き出し、更に、協調性や融和、責任感を育てるのに効果があったことが発表された。

〈編集部より〉

・第23回大会は、例年通り4,012余名の参加者を迎えまして、盛大かつ厳粛に開催されました。会員の皆様方に多大の感銘を与えたことは言うまでもありません。

・会長の「ごあいさつ」にもありましたように、参加者全員、お招きした加藤（午前）・石黒（午後）両講師のうまみのある講演に、ただただ酔い痴れたかの感がございました。

・所で、本部事務局内の内輪話で恐縮ですが、会長には、全体講演講師のご依頼に就いて毎年大変なご苦労を為されて居ります。道教育界に貢献されるような立派な方をという人選の困難さもさる事ながら、一番の問題点は、有名人と言われるような人には常識的に考えて、その時の相場的謝礼をお払いしなければならないことにあるようです。当研究会の予算が潤沢で無い事をお考え預ければ、会長のご苦労の程が推察されると思います。

・さて、これも会長に関係の有る事項ですが、この度の「研究紀要」第23号から、巻頭言欄の体裁を若干変えてみました。見る立場の皆さん方にいくらかでも新鮮味を与えれば幸いと存じます。

・最後に、各教科部会の記録にあたられた先生方ご苦労様でした。衷心からお礼申し上げます。尚、「会報」第44号のご活用を重ねてお願い申し上げる次第です。　〈編集部―沢田〉